

## 「元代国家与社会国際学術研討会」参加記（速報）

櫻井智美・渡辺健哉

### はじめに

2012年8月24日～28日、中国元史研究会・南開大学歴史学院・張北県人民政府が主催する「元代国家与社会国際学術研討会」が開催された。本会議には、国内外の元史研究者約130人が参加・報告し、日本からは筆者たちのほか、四日市康博氏、向正樹氏の計4名が参加した。本会議は、近年、年に一度開催されている中国元史研究会主催の学会の一環であり、天津で開催されるのは2006年以来であった。昨年末に出された第一次通知の時点では、天津の南開大学が事務局となり、天津で8月24日～26日にかけて開催される予定であった。しかし、4月付の第二次通知の時点で、エクスカージョンの場所が元のチャガンノール行宮・梳妝楼・元中都遺跡などであり、学術報告の後半が、元中都遺跡のある河北省張家口市張北県において26日に開催されることを知らされた。最終の招聘状（インビテーション）でも、エクスカージョンや学術報告日程が多少変更され、24日に天津で受付、28日に張北で解散となることが通知された。本会議の概要について、金石資料をテーマとした報告を中心に、25日までを櫻井が、26日以降を渡辺がまとめる。

### 学会とエクスカージョン

8月24日

分科会及び宿泊・食事の会場となる、天津市匯高花園酒店（匯高ガーデンホテル）で終日受付が行われた。筆者（櫻井）は、城際快速（新幹線和諧号）にて北京より天津入りし、タクシーで会場へ移動、16:00受付・チェックインした。受付で、総900頁近くある上下冊の学会資料、主催者からのおみやげである天津泥人張（180年以上の歴史を持つ天津の伝統的な泥人形）の額入り京劇面、その他献本などが配布された。

18:00より夕食と資料にあったためフロントに降りていくと、18:30からに変更になったとのことで、久しぶりの対面となった参加者たちがあちこちで旧交を温めているのが見られた。併せて、翌日以降の発表に備え、コメンテーターと打ち合わせたり、論著を贈りあったりした。夕食はかしこまったものではなかったが、あちこちで再会を喜ぶ乾杯の風景が見られた。

当日20:00～中国元史研究会の理事会が開催された。本年は理事改選が予定されており、理事会ではその具体的な準備が行われたようである。報告やコメント・司会を控えて最終の準備に忙しく、睡眠不足のまま翌日に臨むことになった。

8月25日

7:00～朝食、8:30～南開大学商学院において、開会式が行われた（司会：南開大学歴史学院王曉欣教授）。副学長の朱光磊教授及び歴史学院院长の楊棟梁教授による歓迎の言葉が述べられた後、蔡美彪（中国元史学会榮譽会長・中国社会科学院榮譽学部委員・近代史研究所研究員）の講話があった。蔡氏は中国元史研究会の会長を長く務めたが、諸事情から1990年以降北京を離れたことがなく、元史研究会の関連学会にも、2009年に北京で開催された「紀念元大都國際學術研討会」を除いて参加されることがなかった。久しぶりに北京を離れ、氏の出身大学である南開大学にいらしたことを大変喜んでおられた。そして、陳垣・韓儒林らにより元史研究が始まった1930年代を振り返り、その当時の学問が現在のモンゴル・元代史研究の基礎としてやはり重要であることを述べられた。また、1980年に元史研究会が発足して以来、南京大学などを中心に全国的な研究集会が開催されるようになったが、そのような場において学問について語り合い、お互いに意見・評価をしあうことで学問のレベルを高めていくことの重要性を指摘され、これまでの南開大学・南京大学の努力を称えられた。ついで、Yuan-Chu Lam（劉元珠）（ウェルズリー大学東アジア言語文学部教授）が挨拶され、台湾出身でアメリカで教鞭を執る氏が中国の元史研究会に最後に参加した1986年と比較し、元史研究の規模が拡大し、とりわけ、女性の若手研究者が多数参加していることに感慨を述べられた。

最後に、中国元史学会の現会長である李治安（南開大学歴史学院教授）が、南開大学が中心に関わった2009年の「元上都与元代社会」學術研討会と比較し、今学会の特色を3点にまとめた。①規模が大きいこと。130余名の報告者が報告し、その内容も多彩である。②発表の質が向上したこと。今回の学会では論文の本文もしくは提要进行を6月までに送付することが求められ、質の高い発表に期待することが通知されていた。実際に資料に載せられた論文は79本、提要は27本で、以前の学会で見られたあまり学術的ではない発表がほぼ排除されていることが明らかだった。③主要テーマを『至正条格』・黒城出土文書などの新出文書・金石資料と限定したこと。これらの資料は数年前から元史研究における重要資料として注目を集めてきたが、これらを特集したことが今回の学会の特長であり、約50本がこれらに関する発表であった。これら3点の特色を生かした学会が成功に終わるように祈念し、また、蔡美彪、陳得芝（南京大学歴史学系教授）、周清澍（内蒙古大学蒙古学院教授）ら老大家の臨席に感謝の辞を述べられた。事務連絡として、学会日程の変更・翌日の張北への移動及び報告論文の締切が10月末日であること（のち11月末に変更）等が司会より伝えられ、開会式は終了した。その後、商学院の入口で記念撮影が行われた。

9:20 予定より20分早く本会議（総会）の學術報告が始まり、6人が報告を行った。今回の学会では、すべての報告にひとりずつコメンテーターが割り当てられ、15分の発表時間（分科会では10分）と5分のコメント時間が設定されていた。

学術報告の冒頭は、陳得芝「1989年山西臨汾発見的蘇公式墓誌」（評論人：洪金富）で、石刻を特集する本学会の冒頭発表に相応しいものであった。陳氏はこの墓誌を、大蒙古国時代に関する『元史』等資料の欠を補い、先撫軍及び元朝・キプチャク=ハン国の往来等に関する貴重な情報を提供するものとして紹介された。次の洪金富（中央研究院歴史語言研究所教授）「史語所藏遼金元石刻拓片評介」（評論人：周清樹）では、最近上梓された『中央研究院歴史語言研究所藏遼金石刻拓本目録』（同所,2012）を初めとした台湾の中央研究院歴史語言研究所（史語所）における金石資料調査の歴史を、1950年代に遡って紹介され、史語所所藏拓本の意義を説明された。コメンテーターの周教授が、台湾の書籍・研究が大陸では手に入れにくく、日本滞在時に手に入れられたと語られたことが、たいへん印象深かった。姚大力（復旦大学歴史学系教授）「元郷試如何確定上貢人選及其次第」（評論人：李治安）は静嘉堂文庫所蔵『新刊類編歷舉三場文選』の内容を、おそらく初めて制度的に詳細に分析した研究であり、元代科挙の具体的な実施状況を明らかにした大作である。魏堅（中国人民大学歴史学院教授）「蒙古高原石彫人像的淵源与羊群廟石彫人像研究」（評論人：薄音湖）は、考古学的な見地から、モンゴル時代の石人の分析について、近年調査が進んだ羊群廟（元上都遺跡西北35キロ）を中心に概説された。Ts.Minjin（査・敏吉徳・モンゴル科学アカデミー講師）「元朝加盟国司法制度伝統」（評論人：特木勒）はモンゴル帝国治下の法律伝統についての報告であったが、モンゴル国における元史研究をめぐる環境・条件を考えさせるものであった。四日市康博（早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所招聘研究員）「黒水城出土官文書中的波斯文再考」（評論人：烏云高娃）では、黒城（ハラホト）出土文書中のペルシア文について、吉田順一・チメドドルジ編『ハラホト出土モンゴル文書の研究』（雄山閣、2008）における磯貝健一・矢島洋一両氏による解読を補正するとともに、四日市氏が主催する「モンゴル期多言語複合文書研究」を紹介し、そこで研究が進むアルダビール文書との比較を行った。氏の発表は、資料研究の最新成果を紹介する質の高い発表であったが、日本語での発表で通訳者が翻訳しきれないところも多く、内容の詳細を理解できる参加者がどのくらいいたかと考えると、少し残念であった。

12:30～昼食・休憩、14:30～分科会が始まった。本学会では、「元代金石碑刻及びその他資料の研究」・「黒城出土文書・至正条格及び関連問題の研究」・「元代の国家と社会」・「チンギス=カンと13、14世紀の中国」という4つの分科会が設けられ、それぞれの分科会が第1～4セッションに分けられ、5～6本の報告・コメントが行われた。ここでは、石刻研究と最も関連する「元代金石碑刻及びその他資料の研究」における発表についてまとめる。

【第1セッション（司会：高栄盛・四日市康博）】

- ・趙華富（安徽大学）「從清康熙年間国子監啓聖祠発見的元碑看元代的取士之制」（コメンテーター（以下同じ）：申万里）
- ・呉志堅（浙江図書館）「欧陽玄的《天馬賦》」（許守泯）

- ・櫻井智美（明治大学）「元代的岳瀆祭祀：以濟岳瀆廟祭祀為中心」（不在）
- ・楊曉春（南京大學）「讀新中国出土元代墓志校《元史》相關列傳」（毛海明）
- ・許守泯（台灣成功大學）「元代山東平原縣廟學建設的個案分析」（櫻井智美）
- ・劉中玉（中國社會科學院歷史研究所）「蒙元前期仏道之爭下全真教圖像志的建構」（向正樹）

【第2セッション（司会：韓志遠・櫻井智美）】

- ・任崇岳（河南省社會科學院）「從碑刻看河南省的維吾爾人」（魏堅）
- ・渡辺健哉（東北大學）「《經世大典輯本》中元代禮儀的相關史料」（周鑫）
- ・趙文旦（山東師範大學）「元代的章丘張氏」（趙一兵）
- ・陳波（南京大學）「元史訂補二題：兼論元人碑傳文字的誤墓与曲筆」（劉中玉）
- ・魏亦樂（南開大學）「《國朝文類》元刻諸板本雜考」（陳波）
- ・李嶺（內蒙古師範大學）「天元二年“永昌等處行樞密院斷事官印”跋」（薛磊）

報告内容は石刻資料を利用した基礎的研究から、石刻資料と典籍資料の対比を行なうものなどに加え、書誌学的な資料研究も含まれていた。金石資料が普遍的かつ一般的な研究対象として定着し、石刻研究が十分に成熟してきた様子がうかがえた。コメントも、資料の利用状況の好転を指摘し、それを利用することが新しい見解を導く方法であることや、そのような細かい点にも配慮した研究が求められることを指摘するものが多かった。これまでの学会と同じであるが、報告時間の制限から、セッション全体での討論の時間がとれなかったことは残念であった。参加者が多くても全体討論の時間を設けることが、海外を含めた多くの元史研究者が集う意味ではないのかという疑問も聞かれた。

18:00～歓迎宴会、あちこちで中国風の乾杯の声が聞かれ、私たちも主催者である南開大学の先生方にお礼を申し上げた。20:00～元史研究会理事の改選を行なう会員総会が開かれた。まず、2007年広州における改選以降の元史研究会の活動が総括され、2008年「慶賀蔡美彪先生八十華誕“元代民族与文化”国際學術研討会」（甘肅省蘭州市）、2009年「“元上都与元代社会”學術研討会」（內蒙古自治區シリングル盟、元上都遺跡）、2010年「元代杭州研究論壇」（浙江省杭州市）、2011年「“元後期政治与社会”學術研討会」（安徽省阜陽市）及び今回の学会開催、『元史論叢』第11～13輯の出版、各種研究資金への応募成果などについて言及された。今後の活動方針としては、会員が増加している状況をうけ、会員相互の連絡をより密にして、大学院生などの研究活動全般にも有益になるように、また、研究会としてのよりよき学習・研究の伝統を引き継いでいけるよう努力することが確認された。その後、新理事三十数名について信任投票が行なわれ、候補者全員が新理事に就任することに決定した。

8月26日

6:55 大型バス三台に分乗し、匯高花園酒店を出発。天津より北京へ向かい、北京は市内を経由せずに、六環路を東に回り、八達嶺高速を北上した。途中渋滞に巻き込まれ

たため、11:30 に到着する予定が大幅に遅れた。14:22 張北南 IC 通過。14:37 張北県政府招待所で昼食。15:34 に宿泊先の宏昊假日大酒店に到着。スケジュールの変更が告げられ、この日の晩に見学する予定だった元中都博物館の参観は翌日に、分科会は 16 時からの開始、報告時間も 10 分（評論時間 3 分）に短縮された。

【第 3 セッション（司会：陳有和・渡辺健哉）】

・向正樹（大阪大学）「忽必烈朝期海上勢力的個別研究—“楊庭璧平寇記”和相關資料的分析」（陳波）

・趙一兵（呼和浩特職業学院）「《元史》有関鞏昌汪氏記載辯正六則」（劉曉）

・薛磊（南開大学歴史学院）「元代義兵考述」（毛海明）

・毛海明（北京大学歴史学系）「張易史事新証」（葛仁考）

・陳璋（復旦大学歴史系）「元奉直大夫南陽屯田副総管張謙墓誌銘考釈」（不在）

・葛仁考（邢台学院）「元代“鉅鹿県廟学碑”考釈」（楊曉春）

【第 4 セッション（司会：同上）】

・張韶華（南開大学歴史学院）「《経世大典》纂修人員補考」（渡辺健哉）

・李広沢（洛陽市文物管理局）「從洛陽元代寺院碑刻看当地文化的復興」（不在）

・何啓龍（香港東華書院）「元代蒙訳漢式占卜術是源於官刊曆書或是民訳占卜書？—以内蒙古哈刺不罕古城樺樹皮文書為中心」（不在）

・于月（北京大学歴史学系）「《漢訳本〈史集・部族志・乃蛮伝〉校正》」（魏曙光）

・周鑫（広東省社会科学学院）「《朱子家礼》真偽問題傍証」（洪麗珠）

・高建国（内蒙古大学蒙古学研究中心）「《南村輟耕録》与《広客談》」（不在）

報告内容は第 1、第 2 セッションと同様に、石刻資料を活用したもの、モンゴル国 Xarbusyn（哈刺不罕）Balgas で発見された白樺文書を利用した研究等の報告が行われた。第 1、第 2 セッションのまとめでも述べているように、石刻資料に関する研究はここでも多かった。とくに博士生は、一つの石刻資料に注目し、そこに注釈を付していくといったスタイルの研究がみられた。また、『集史』の漢語訳の一部について再検討を加えた于月氏の報告は、2010 年 4～6 月に北京で行われた、中国社会科学院・北京大学・北京師範大学の教員と大学院生によるペルシア語史料の「読書班」に参加した際の成果だという。南開大学、南京大学に続き、今後は北京大学に多くの人材が集まり、モンゴル時代史研究の中心となっていくことを予感させた（後述）。

19:00～歓迎宴会。張北県の政府関係者、元中都博物館の館員等がホストとなって、地元の白酒「千年中都」もふるまわれ、賑やかな宴会となった。博物館の李映虹館長がすべてのテーブルを回りながら、参加者から注がれる白酒を次から次へと飲み干していく様子に驚かされた。

8 月 27 日

6:55 ホテル発。張北から東北に進んで、一路チャガンノール（河北省沽源县）を目

指す。9:27 チャガンノール (=白海) を見渡せる草原に到着 (ここが大宏城)。あちこちで記念撮影をする様子が見られた。9:44 同所発。9:51 小宏城遺跡に到着。ここがチャガンノール行宮である。低層の城壁がほぼ完全に残っており、中央部に城壁とほぼ同じ高さのマウンドが形成されている。車中で配布された調査図では中心閣に比定されている。地表には瓦やレンガの破片が散らばっていた。10:40 同所発。11:27: 梳妝楼に到着。一辺が約 10m のほぼ正方形で高さ約 9m の建物で、屋根はドーム状になっている。1999 年の調査で楼内の地下から元墓が発見された。11:57 同所発。13:57 招待所に到着、のち昼食。14:47 同所発。予定よりも 40 分遅れて 15:10 から学術報告が開始された。

李治安「元吳澄八思巴字宣勅文書初探」(評論人:張帆)は、日本の宮内庁書陵部に蔵される明刊本『臨川吳文正公集』巻末に残されたパスパ文字で書かれた 11 件の命令文に注釈を施し、検討を加えたもの。2007 年 10 月、日本滞在時に自ら閲覧した成果にもとづくという。王頌(暨南大学古籍研究所教授)「一涇川近」(評論人:王明蓀)は、遼・金代の「涼涇」が金代の「金蓮川」、元代のチャガンノールと同じ土地であることを述べた。王明蓀(台湾中国文化大学史学系教授)「元代幾種方志中的官職問題初探」(評論人:高榮盛)は、『至正金陵新志』『延祐四明志』等の五種の地方志に表れる官職について分析した。孟繁清(河北師範大学歴史文化学院教授)「平江路税糧考述」(評論人:趙華富)は、平江路の税糧の規模を、世祖から武宗にいたる第一期、仁宗から寧宗にいたる第二期、順帝の第三期に分けて関連する史料を列挙していき、北方に税糧を運ぶ基地として平江が重要な場所であったことを述べる。劉曉(中国社会科学院歴史研究所研究員)「元代贖刑制度芻議」(評論人:姚大力)では、贖刑に関わる『元典章』の条文を分析した。現在の日本人研究者の大半がこうした制度研究を敬遠しつつある現状を考えると、日本人も改めて取り組む必要があるのではないかと感じた。孫繼民(河北省社会科学院研究員)「黒水城文献所見元代肅政廉訪司“刷卷”工作流程」(評論人:劉曉)は、『俄蔵黒水城所出《宋西北辺境軍政文書》整理与研究』(中華書局、2008)や『俄蔵黒水城漢文非仏教文献整理与研究』(北京師範大学、2012 年)の著者による黒水城出土文書に関する研究。文書末尾に付される照刷(文書のチェック)に関して、10 件の文書をもとに検討した。楊潔(西安碑林博物館館員)「2009 年中国考古重要発見元代劉黒馬家族墓」(評論人:趙文坦)では、西安出土の劉黒馬・劉元振・劉天傑の墓葬が紹介された。すでに『中国文物報』(2010 年 1 月 15 日)や『2009 年中国重要考古發現』(文物出版社、2010 年)などで公表されている事実であるが、出土文物や墓誌銘についての紹介を行った。ただ、学会資料には「陝西地区蒙元墓葬的發現与研究」と題する、近年発見が続く陝西地区の元代に関する出土文物を網羅的に紹介した論考が掲載されている。『文物』『中国文物報』等に紹介されているものはもちろん、『西安晚報』など日本では入手が難しいと思われる新聞記事まで紹介してある。写真をふんだんに盛り込んだパワーポイントを利用しての報告であったため、参加者がデジタルカメラでスクリ

ーンを撮影していた。西安・洛陽周辺からは隋・唐代の石刻資料が陸続と出土し、整理がなされている。これと同じペースで発見されるとは考えにくい、西安の中心から周辺部に開発が及ぶことで、モンゴル時代に関わる新たな資料が出現する可能性もあろう。王曉欣「元公文紙印本史料初窺——宋刊元印本《増修互注礼部韵略》紙背所存部分元代資料浅析」（評論人：孟繁清）では、上海図書館に所蔵される『増修互注礼部韵略』の紙背に残された元代の土地に関する文書が紹介された。

18:10～閉会式が行われた（司会：張北県副県長孫海英）。まず陳得芝（南京大学歴史系教授）が簡単な感想と張北県への感謝を述べた。ついで元史研究会会長の劉迎勝（南京大学歴史系教授）が今大会の総括を行った。まず、若手の報告が多かったことを述べたのち、今学会の特徴として「黒城出土文書」「石刻資料」「考古資料」「文書」等の新出資料を利用した研究が多かったことを指摘した。なかでも特筆すべき研究として、四日市康博氏の報告と亦集乃路に関するいくつかの報告を挙げていた。最後に李治安教授による前日に行われた理事会の報告があった。まず前述の選挙結果を受けた理事の名前が読み上げられた。さらに、論文についてはこれから紙による出版を控えて電子版を利用する旨が述べられた。そのうえで以下の三点が討議されたという。①修士・博士同士で研究テーマの重複を避けること。②元史研究会が国家から重点項目の指定を受け、特に古籍の整理に力を注ぐことを目指す。③学術雑誌・論文集の数が多いため、できるだけ質の高いものを残していく、とのことであった。これに続き、張北県県長の孫曉函氏より閉幕の辞が述べられた。

19:00～宴会開始。この後に博物館の参観が予定されているため、アルコールは控えめにしながら食事をとった。20:30 ホテル発。20:37 元中都博物館着。本博物館は2010年12月11日に開館した。近年になって新たに建設される中国の博物館の例にもれず、巨大な博物館であるため、ゆっくりと見学ができる。博物館は「元朝の歴史」と「元中都の歴史」に関する展示を中心としている。中都遺跡で出土したものが少ないためか、元代関係のものは複製品が多かった。最大の見所は入口ホールの左右に整然に並ぶ63個の漢白玉石の螭首と、その中心に鎮座するガラスケースに収められた螭首であろう。ガラスケースの螭首は、両手で地面をつかんで首を持ち上げている珍しい造形で、体を支える腕の力強さを強調した描写がとても印象的であった。二階には中都城と巨大な角楼の復元模型が展示されている。21:55 博物館発。22:00 ホテル着。

8月28日

7:20 ホテル発。7:41 中都遺跡到着。筆者（渡辺）は、2009年8月と2011年9月に続く三度目の訪問となるが、これまでよりも遺跡の復元作業が進んでいたことに驚かされた。中心閣の基壇の一部をレンガで覆う作業が昨年よりも進展していた。そして昨年までは遺跡の真ん中を斜めに貫いていた道路の舗装が完全に剥がされていた。おそらく、宮城の南門を遺跡の入口として、そこから中心閣にいたる直線の道路が計画されている

のであろう。ただ宮城を取り囲む城壁は以前と変わらぬ様子で残されている。9:05 同所発。ここで天津と北京に向かうバスにそれぞれ分かれた。筆者の乗るバスは張家口駅で何人かを降車させたのち北京に向かった。12:43 北京市地下鉄 13 号線西二旗駅着。各自ホテルに向かう。

## むすびにかえて

最後に、本学会に参加した感想を簡単にまとめておく。

まず、南開大学と南京大学の博士生（日本の博士課程生）の数の多さに驚かされた。特に南開大学の勢いを感じた。現今の中国において、李治安・王晓欣教授の薫陶を受けた学生が、各地の大学や研究機関に数多く就職していることからその勢いがうかがえる。ついで増えていくであろうと予想されるのが、張帆・党宝海教授の指導する北京大学の博士生であろう。南開大学と北京大学との交流も盛んなようで、南開大学の博士生であった馬曉林氏は博士号を取得したのち、北京大学張帆教授のもとで博士後（＝日本の日本学術振興会特別研究員〔PD〕に相当）として引き続き研究を行うという。国を挙げて博士生～研究者を育成していくシステムが整備されつつある現状を感じた。

また、すでに幾度も指摘されていることではあるが、日本人が自らの研究成果をいかに発信していくのかということ、またそれと関連して、どのようにしたら外国人に読んでもらえるのか、ということは改めて考えなければならないと感じた。日本人の研究が目される理由として、外国人であるからこそそのアイデア＝着想と、すでに言われ続けている史料の精緻な読み込みが挙げられるだろう。ただしこうした点については、前述した博士生を含めた研究者の数の多さと、それに伴う研究者の能力の向上により、いずれ勝負できなくなっていくのではないかという危惧を感じた。

どのようにすれば解決するのか、即座に解答が見つかるような性格のものではない。たとえば、こちらから情報を細やかに発信すること、そして中国・台湾・欧米の研究状況を丁寧収集し分析すること、そして外国人研究者との共同研究などがたちどころに思い浮かぶ。とまれ、この課題はこれから常に意識し続けていかなければならないと感じた。

なお、今回の学会で報告された内容は『元史論叢』第 14 輯に掲載され、刊行される予定になっている。

### 【付記】

今回の学会では、李治安先生、王晓欣先生、そして薛磊先生をはじめとした南開大学、そして張北県の関係者の方々には大変お世話になった。特に我々が外国人ということもあり格別なご配慮をいただいたと思う。末尾ながら記して感謝申し上げたい。

（さくらい さとみ 明治大学、わたなべ けんや 東北大学）